

5. 南相馬市 【原町区北萱浜地区の様子】

2020年3月11日「北萱浜地区稲荷神社」に予定通り午後2時30分到着。

神社前の慰霊碑には、津波と関連死で亡くなった63人の名前が刻まれている。

お習字に来ていた小学6年男子、4年女子、祖父の3人を亡くされた遺族と、毎年この場所で黙とうする。

9年目の震災の今日、20才になった幼友達が那須からやって来た。墓前で冥福を祈る。

午後2時46分、慰霊のサイレンとともに海に向かって黙とう。この日の海は穏やかだった。



津波で流された屋敷跡



高台から今の萱浜地区を望む



赤印 ロボットテストフィールド

防潮堤・防潮林・太陽光発電



津波を免れた高台の屋敷



北萱浜稲荷神社



防潮堤 海側砂地

津波から免れた高台からは、国家プロジェクトによる「福島県イノベーション・コースト構想」に基づく「福島ロボットテストフィールド」の施設が見渡せる。～世界に名だたるロボット最先端技術の実証実験フィールド～としてマスコミ等が取り上げる。これまで取材したどの町も「福島県イノベーション・コースト構想」によるまちづくりを謳う。

復興は経済優先で進む。けれど、私たち住民の心の復興は、人と人とのつながりや思いやりを築きながら進むが、心の復興は置き去りにになっている。

遣り切れない思いで、遙か北萱浜の海を眺める。太平洋は洋洋と広がり、あの日が嘘のように穏やかだ。

北萱浜地区は、津波被災で多くの犠牲者が出た。この広い地は「災害危険区域」に指定された。



津波跡地 工業団地建設中



フェンス中「ロボットテストフィールド」



施設入り口案内版



どこまでも続く太陽光パネル

復興工事中まだ先



遺族となった友人は言う。

「仕方ないべ。だども我が家が、何処にあったのか分からないのはつらいな～せめて家のあった場所に、小さくてもいいから表札あれば先祖も安心すっぺな～」

開拓の歴史を築いて来た住民は、助け合いの精神を今日まで繋いで来た。しかし、今は失われている。津波で壊滅した地区は、「災害危険区域」で戻れない。市は住民の土地を買い上げた。住民のほとんどは、新たな地域に家を新築、或いは災害公営住宅に移り住んだ。地域はばらばらになった。



開拓貢献碑 相馬充胤公碑など



表札があったらいいのに・・・

萱浜集落の民家位置一部



市営災害公営住宅

【荒地を切り拓いた浄土真宗移民 北萱浜歴史】

この地方は慶長16(1611)年に中村藩初代藩主の相馬利胤から始まり各藩主が、徳川幕府治世の下、平安な時代が続いた。しかし天明3(1783)年、浅間山の大噴火や冷害による全国的な飢饉が起きた。

領内に餓死や逃散が続出し、中村藩の人口は53,000人から33,000人程に減少した。藩は、領民の救済と復興を目指したが、激減した農民によって荒廃した農地を再生することは叶わなかった。

文化10(1813)年から幕法により禁じられていた移民政策を始めた。加賀(石川県)・越中(富山県)・越後(新潟県)から移民として中村藩領には廃藩置県までに、2,555戸(1万人程)が各所に配置された。荒廃した農地の復興に窮していたが、弘化2(1845)年二宮金次郎の報徳仕法導入により、用水開削と溜池の造営などの整備と仕法の実施によって、藩の経済立て直しと改善に大きく貢献した。

萱浜村も天明の飢饉で担い手を失い農地は荒廃した。農地再生のため40戸の移民を配置し、報徳仕法により復興を遂げた。しかし、原野に戻った農地の再生は苦難の連続だったが、過酷な労働を、浄土真宗の深い信仰によって耐えた。人々は「南無阿弥陀仏」を念じては、開墾に励んだ。萱浜の地は、先人たちの苦難によって再生した歴史を大事にし、人々は祖先を尊ぶ。



圃場整備前の航空写真

【赤丸内が、北萱浜集落中心区域】

「北萱浜史」1986 北萱浜史編集委員会資料より